1	言葉の力をつけよう（音読1年②） 〔古典落語「まんじゅうこわい」〕
言葉	
名前	

「まんじゅうこわい」も古典落語の代表的な作品です。声に出して読んでみましょう。

まんじゅうこわい

若い男たちが一人の家に集まって、雑談をしているうちに、こわいものについての話題になりました。

「おれは蛇がこわい。あの動き方が嫌だ。」「おれは狸がこわい。お化けに姿を変えるから。」「おれはクモだ。クモの巣はねばねばする。」「おれはコウモリだ。夜飛びやがる。」「おれは毛虫だ。葉っぱの裏に隠れていやがる。」「おれはアリだ。一列になって動きやがる。」

みんなこわいものを話す中で一人だけ黙っているものがいました。

「おい、光っつぁん。こわいものはないのかい。」「こわい！　こわいもんなんか何もないよ。」

「蛇もクモもお化けもこわくないんかい。」「そんなものはこわくないよ。」

「蛇、そんなものは頭が痛いとき、頭にまきゃ涼しくならあ。」「たぬき、お化けが出たら、料理して、洗ってきれいにしてやらあ。」「クモ、納豆に混ぜてかき回してやらあ。」「コウモリ、傘にしてやらあ。」

「毛虫、棒をさして歯ブラシにしてやらあ。」

と、言いながら、光っつぁんは突然話すのを止めてしまった。

「どうしたんだい。」「こわいものを思い出しちゃった。」「それはなんだい。ぜひ教えてくれよ。」

「まん、まんじゅうがこわい。」「まんじゅう、そりゃどういう動物だい。」「動物じゃないんだ。店で売っているものなんだ。ああ思い出しただけで気持ち悪くなる。」

顔色がみるみるうちに悪くなってきた。

「ああ、座ってられない。隣の部屋に布団をしいてくれ。」

床に入ると、とうとう布団で顔をおおってしまいました。

これを見て、みんなは笑って、いたずらをすることにしました。

数人が町へ出かけて色々なまんじゅうを買ってきました。酒まんじゅう、温泉まんじゅう、蕎麦まんじゅう、栗まんじゅう、赤まんじゅう、白まんじゅう、葬式まんじゅう、肉まんじゅう色々です。

おぼんにまんじゅうを乗せると、こっそり枕元に運び、気が付くのを待ちました。

「ねえ。光っつぁん。起きなよ。もうお開きだよ。」「わかったよ。起きるよ。でも、もうまんじゅうのことは言わないでくれよ。」「わかったよ。もう話さないよ。」

大きな叫び声が聞こえた。

「うわ、まんじゅうだ。まんじゅうが一杯だ。」

となりの部屋のみんなは大満足。

「おいみんな、どうしてこんなことをするんだよ。約束しただろう。まんじゅうこわい。まんじゅうこわい。」

大きな声をあげれば上げるほど、みんな大喜び。

「うわ、酒まんじゅうだ。こわい、こわい。」「うわ、栗まんじゅうだ。こわい、こわい。」「うわ、まんじゅうこわい。うまいし・・。こわい・・。」

様子のおかしいのに気がついて部屋の中をのぞいてみました。

「うれしそうだぜ。まんじゅう食ってるぜ。こりゃだまされた。ねえ、光っつぁん、ほんとは、一体何がこわいんだい。」

「本当にこわいのは、熱くておいしいお茶だ。」